

ギュスターヴ・カイユボット 《ピアノを弾く若い男》

新畑泰秀

レースのカーテンを通して、窓から柔らかな光が降り注ぐ瀟洒な邸宅の一室。部屋の中央にはグランド・ピアノに向かう男。パリジャンが過ごす午後のひとときを、隣室の鍵穴より覗き見ているかのようだ (fig.1)。構図、賦彩と光の表現に気を配って描かれたこの絵画が、モネやルノワールとともに絵画の革新運動を担った画家の作品と聞いて、不思議に思う人もいるだろう。作者はギュスターヴ・カイユボット。1876年の第2回印象派展以降5回にわたって印象派展に参加した。画家としての存在は、それほど広く知られているわけではない。その名はむしろ、印象派の援助者、あるいは世紀末にパリの美術界を賑わせた「カイユボット事件」の中心人物として、知られているかもしれない。

1848年、軍隊に寝具を供給する事業により財を成したマルシャル・カイユボットの息子としてギュスターヴ・カイユボットは、パリのフォブール＝サン＝ドニに生まれた。恵まれた環境に育ち、名門リセ（後期中等教育機関）ルイ＝ル＝グランを卒業した後、1869年に法律大学資格免状を得、翌年には法律特許を取得。同年から翌年にかけては普仏戦争に従軍した後絵画を志し、印象派と関わりながら多数の作品をのこした。生涯独身を貫き、パリ8区ミロメニル通りに父親が建てた邸宅を住まいとし、あるいはパリ近郊エソンヌ県のイエールの別荘で過ごし、園芸、川船の設計と船遊びを楽しみ、絵を描きながら過ごした。1882年にはパリの北西部セーヌ河畔のプティ・ジュヌヴィリエに弟と建てた邸宅に移り住み、1894年に当地で没した¹⁾。享年45歳であった。

カイユボットの画家としての活動は、印象派展



fig.1
ギュスターヴ・カイユボット 《ピアノを弾く若い男》
1876年、石橋財団ブリヂストン美術館

期より認められて生涯を通じて続けられた。しかし自ら作品を売却せず、展覧会への出品も印象派展の第2回展から第6回展を除く第7回展まで出品されるが、それが最後となる。さらに没後に遺された作品もその多くが遺族のもとに長らく留めおかれて来たために、作品が世に示された機会は決して多くはなかった。すなわち1894年にデュラン＝リュエル画廊で個展、1921年にサロン・ドートンヌで回顧展が開かれたが、後には小規模の展覧会がパリの画廊と地方で開かれたにすぎない。比較的大規模な展覧会としては、1976年から翌年にかけてヒューストン美術館とブルックリン美術館で開催された回顧展があるが、画業を総括する展覧会としてはさらに20年の時を経て1994から翌年にかけて、生誕100年を記念して開催されたパリのグラン・パレ・ナショナル・ギャラリーとアート・インスティテュート・オヴ・シカゴでの回顧展を待たねばならなかった。近年では2005年にローザンヌのエルミタージュ財団で、2008年から翌年にかけてコペンハーゲンのオードロップゴー美術館とブルックリン美術館で個展が、2011年から12年にかけては、パリのジャックマール＝アンドレ美術館とケベックのカナダ国立美術館でカイユボット兄弟を主題とした展覧会が開催され、画業への関心がようやく高まり始めている²⁾。

ギュスターヴ・カイユボットが没して120年が過ぎようとしている。都会的なセンスに溢れ、現代性を強く喚起させるその作品は今あらたに見出されようとしている。印象派に位置づけられながら着実な造形感覚に支えられた伝統的な表現手法を遵守し、当時のアカデミズムの自然主義的表現とも通じる特異な位置を確立している画家である。2012年に開館60年目を迎える石橋財団ブリヂストン美術館は、ギュスターヴ・カイユボットの初期の作品《ピアノを弾く若い男》(fig.1)をこのたび新たに収蔵した。本稿はカイユボットと印象派とのかわりに触れながら、この作品について紹介しようとするものである。

1. カイユボットと印象派

裕福な家柄ゆえ、幼少期より芸術に接する機会に恵まれて育ったと想像されるカイユボットが本格的に絵筆を取るに至った経緯は何ら想像に難くない。有閑階級にあってさらに画業を本格化させ

た一つの契機となったのは、1872年に父親と訪れたイタリア旅行であったらしい。この時、父子はロンドン、パリと幅広く活動していた画家ジュゼッペ・デ・ニティスと接触する機会を得たとされる。自然風景と都会風景を明るい色彩、生氣溢れる筆触で描き、第1回印象派展にも出品することになるイタリア人画家との出会いは、若きカイユボットの絵画への志を喚起したものと想像される。直後にアカデミーの肖像画家レオン・ボナのアトリエに通うようになり、翌年にはその弟子としてエコール・デ・ボザールへの入学を果たしている。

この頃カイユボットはさらにエドガー・ドガと知り合い、絵画の革新を目指す一群の画家たちと交流するようになる。しかし1874年の第1回印象派展に出品することはなかった。それは、保守的な家柄が革新運動に参加することを躊躇させたのかもしれないし、あるいは美術学校で伝統的技法を叩き込まれている最中に、印象派の目指す急進的な方向性を理解するのに時間を要したのかもしれない。2年後には、オーギュスト・ルノワールとドガの弟子エルネスト・ルアールの招きで、第2回印象派展に参加。出品目録によると、8点の作品を出品し、以後その情熱の多くを絵画の革新運動に注ぎ込むことになる³⁾。

第2回印象派展（名称は第1回展と同様その名に「印象派」の名はなく、単に「第2回絵画展」であった）は、ル・パルティエ通り11番地のデュラン＝リュエル画廊で、1876年4月11日から5月9日まで開催され、20人の作家による252点の作品が展示された。参加者は初回に比べると減少していた。

その理由は、第1回展の参加者たちの何人か、すなわちセザンヌ、ブラックモン、ブーダン、ギョマンらが、絵画の革新を声高に叫ぶことを旨とする展覧会に出品して、再び酷評を浴びることを恐れたからであった。展覧会目録によると、モネは18点、ルノワールは15点、ドガは24点、モリゾは17点、ピサロは13点、シスレーは8点を出品し、初参加のカイユボットは以下の8点を出品している⁴⁾ (fig.2)。

- 17 床削り〈パリ、オルセー美術館 Berhaut 1978-No.28: 1994-No.34〉
- 18 床削り〈個人蔵、パリ Berhaut 1978-No.29: 1994-No.35〉
- 19 ピアノを弾く若い男（マルシャル・カイユボット）〈ブリヂストン美術館 Berhaut 1978-No.30: 1994-No.36〉
- 20 窓辺に立つ男（ルネ・カイユボット）〈個人蔵、ニューヨーク Berhaut 1978-No.26: 1994-No.32〉
- 21 昼食〈個人蔵、パリ Berhaut 1978-No.32: 1994-No.37〉
- 22 庭〈?〉
- 23 庭〈?〉
- 24 昼食の後〈所在不明 Berhaut 1978-No.20: 1994-No.2〉

第2回印象派展は、ブーダンらの予想に違わず、開催されるや否や一部の保守的な批評家たちの暴言に曝されることになった。たとえばアルベール・

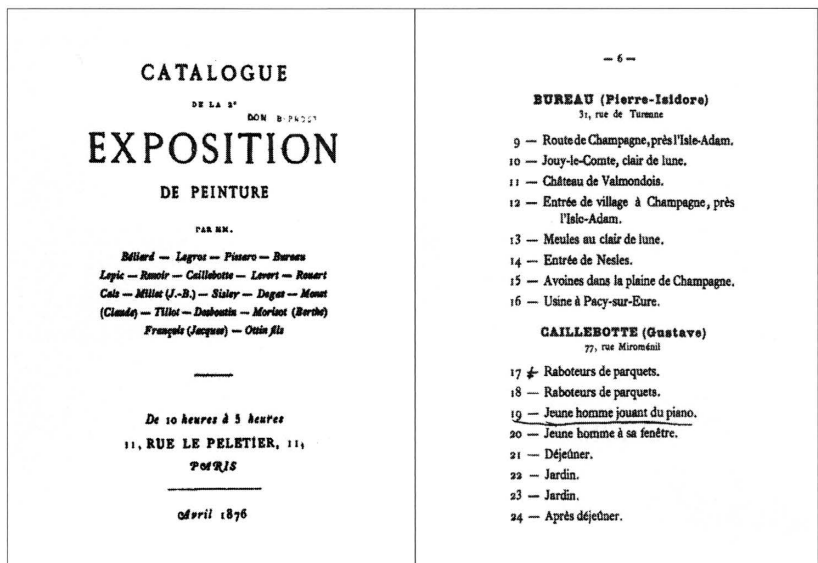


fig.2
『第2回絵画展図録』
(第2回印象派展図録)1876年4月、
※右頁にカイユボットの出品作
Berson, 1996, Vol.1より

ヴォルフは『フィガロ』紙(4月3日付)に「これらの芸術家たちは、妥協することのない印象主義者であると自称している。彼らはすなわち、カンヴァスを用意し、絵具を塗り、筆を走らせ、いくつかの色調をでたらめに置いて、署名して終わり、といった具合だ」と記している⁵⁾。しかし批判ばかりでもない。初回がスキャンダルとなったが故に様々な期待を持って受け入れられた第2回展は、広く新聞や雑誌に報道されてヴァリエーションのある評論を得ることになった。たとえばエミール・ゾラは「われわれが今まさに新たな流派の誕生に立ち会っているのだと、確信させる内容だった。このグループには、やがては美術アカデミー自体を打破するであろう革命の萌芽を見出すことができる」と記し⁶⁾、グループの存在意義を認めて新たな絵画史の流れに位置づけようと試みた。

カイユボットも、新人ながら複数の批評家による評価を受け、それは結果として画家としての意識を以前に増して自覚させ、印象派への関わりをさらに深めていく契機となった。カイユボットは、翌年の第3回展実現のために奔走し、自らもより大型の作品に挑むことになる。さらには展覧会開催のための資金までを調達し、もうひとりの同派の支援者ヴィクトール・ショケとともに、グループでの存在感を増していった。

カイユボットが、仲間の作品を蒐集しはじめるのもこの頃のことである。それはやがて印象派の重要作を網羅した大コレクションを形成するに至る。と同時に自らのコレクションの行く末を考え始め、1876年27歳の時に早々と遺言状を作成し、コレクションを国家に一括して寄贈する意思を示した。この時、カイユボットは作品を、最初は当時の近代美術館として機能していたリュクサンブール美術館で展示してもらい、最終的にルーヴル美術館に収めてもらうことを併せて求めた。カイユボットが没したのは1894年2月21日。同年遺言執行人に指定されたルノワールは、3月11日に美術局長アンリ・ルージュオンにこのカイユボットによる遺言状を送付した。そして国立美術館諮問委員会において故人の遺志は3月20日に受諾されることになった。

ところが当時のリュクサンブール美術館は、それほど広い展示空間を持たず、遺贈願の出された作品の全てを受け入れることを断念した。遺族との間で善後策について協議が続けられたが、結果として展示可能な作品だけが受け入れられることになった。受贈されたのは、申し込み69点のうちの40点—マネ2点、セザンヌ2点、モネ8点、ルノワール6点、シスレー6点、ピサロ7点、ドガのバス

テル7点、ミレーのデッサン2点等であった⁷⁾。ようやくこれら作品がリュクサンブール美術館で公開されると、今度はそこを自らの牙城としていたアカデミーの画家たちが、領域を侵犯されたと激怒し、大きなスキャンダルとなり、新聞や雑誌を賑わすことになった。その後、遺族が強く望むも残りの作品が国に収められることはついぞなかった。このカイユボットの国家への遺贈の顛末は「カイユボット事件」と呼ばれ、世紀末にあつてさえ印象派が保守的な人たちと闘わねばならなかったエピソードとして、しばしば引用されることになる。

国家に受贈された作品は、その後第2次大戦後の1947年にテュイルリー公園内の「印象派美術館」として知られたジュ・ド・ポム美術館(現在のジュ・ド・ポム国立美術館)で公開されて人気を博し、さらに1986年にオルセー美術館に移管されて、今では同館を代表する19世紀部門の重要なセクションを担っている⁸⁾。

2. ピアノを弾く若い男

オルセー美術館には、カイユボット自身の作品《床削り》(fig.3、1875年、パリ、オルセー美術館)も収められている。これは前年のサロンに出品して落選した後に印象派展へ出品された初期の画家渾身の作品である。幾何学的に計算された構図の中で画面は緊密に仕上げられ、光の表現が印象的な作品として注目された。

《ピアノを弾く若い男》は、《床削り》の直後に描かれた作品で、同様に第2回印象派展に出品された。描かれているのは、ギュスターヴの弟マルシャル・カイユボット(1854-1910)(fig.4)。彼がいるのは《床削り》と同じ、兄弟が住むミロメニル通りの邸宅の一室である。見るからに裕福な市民の邸宅の瀟洒な部屋は、同様に計算された構

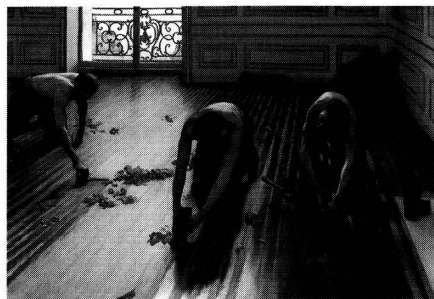


fig.3
ギュスターヴ・カイユボット《床削り》
1875年、パリ、オルセー美術館

図の中に注意深い筆致により繊細に描き出されている。壁面、カーテン、絨毯のそれぞれには、華やかな植物文が施されており、レースのカーテンを通してパリの町並みがうかがえる。窓から注ぐ柔らかな光は室内をほんのりと照らし出している。中央に鎮座するのは当時の最新機器にして贅沢な調度、エラル社（Erard）のピアノである。その表面は、漆黒の鏡面となり、マルシャルの手、鍵盤、部屋の隅に垂直方向に走る2本の金の飾りを鈍く映し出している。主人公たるマルシャルは薄暗いこの部屋で、外部から届く柔らかい光の巧みな表現によって引き立たされ、穏やかに、しかし真摯に鍵盤に楽譜に目を向けている。ピアノの上には無造作に積まれた3冊の厚巻な楽譜集が見える。

楽譜集が如何なる音楽家によるものかは未だ明らかではない。ひとつの説には、コンセルヴァトワールの教授であったアントワーヌ＝フランソワ・マルモンテル（1816-1898）によるものではないか、との指摘がある⁹⁾。マルシャルはコンセルヴァトワールに通い、マルモンテルにピアノの指導を受けていた。自身も音楽家として知られ、1885年にノートルダム・ド・ロレット教会のオルガン曲を作曲し、1887年には「バレエの調べ *Airs de Ballets*」という曲の楽譜がアルトマンという出版者から上梓されている。その音楽様式を娘のシャルドー夫人は「ワグネリアン」（ワグナー楽曲の心酔者）、と伝えている¹⁰⁾。この絵に彼が描かれたのは22歳の時。兄と同様に、自らの芸術的才能の赴くままに過ごすことが出来た弟は、その関心を音楽へと向けたが、兄と同様それを専業とせず、生涯を兄と親密に暮らし、写真や切手蒐集、園芸等々趣味を分かち合い、それぞれの芸術的感性を認め合っていたという。

《ピアノを弾く若い男》に描かれたミロメニル通りの邸宅は、父親がパリ大改造の折、1866年にパリ市から取得した土地に建てられ、同年の11

月に竣工したものであった（fig.5）。《ピアノを弾く若い男》というタイトルに、あるいは気取らないモデルの姿勢に示されているように、カイユボットは、この作品を弟の肖像画として描いた、というよりは、風俗画の如く「室内でピアノに向かう人」の図像を意図して描いたのかもしれない。というのも、第2回印象派展にはもうひとりの弟ルネを描いた《窓辺に立つ男》（fig.6、1875年、個人蔵）が出品されており、それにも固有名詞がタイトルにつけられておらず、しかも、ルネは背面から描かれている。これは、カイユボットが家族をモデルとした親密な情景を描きながらも、その匿名性において、近代生活の一面を切り取って描いた査証とも捉えられ、それは印象派における風景画制作に相通じるものがある。ちなみに《窓辺に立つ男》は、《ピアノを弾く若い男》と縦横の違いはあれ、ほぼ同じ大きさの作品であり、これらが対画、あるいは連作を意図して制作されたことさえ想像される。

3. ピアノのある風景

鍵盤楽器のある情景を描いた絵画の歴史は古い。宗教画においては、たとえば15世紀にファン・アイク兄弟によって描かれた《ゲントの祭壇画》（1432年、シント・バーフ大聖堂）の上段、聖なる父の右側にパイプ・オルガンを弾く様子が思い出される。風俗画における表現としては、17世紀オランダ絵画においてしばしばあらわれる。知られたイメージとしては、フェルメールによる《音楽のレッスン》（fig.7、1662-65年、ウィンザー城王室コレクション）がであろう。これは18世紀ロココの時代のフランス絵画にも受け継がれ、たとえばジャン＝オノレ・フラゴナールは、1769年に《音



fig.4
《ピアノを弾くマルシャル・カイユボット、スクリヴ通り9番地》、個人蔵



fig.5
旧カイユボット邸、向かって左がミロメニル通り、右がリスボン通り（筆者撮影）

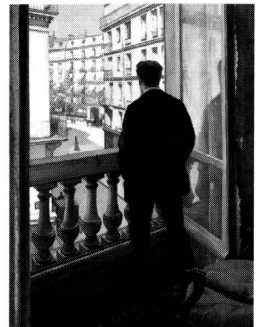


fig.6
ギュスターヴ・カイユボット《窓辺の若い男》1875年、個人蔵

楽の練習》(パリ、ルーヴル美術館)において、貴族の室内遊戯の情景としてこれを描いている。19世紀になってもこの主題は受け継がれるが、絵筆を持つ画家の肖像と同様に、音楽家の肖像として描かれる場合も多い。たとえば、新古典主義の画家ルイ・レオポルド・ボワイエが描いた《作曲家フランソワ・アドリアン・ボワルデュエの肖像》(fig.8、19世紀初頭、ルーアン美術館)は、その典型的な表現と言えよう。

カイユボットの時代、19世紀後半にも鍵盤楽器のある情景を描いた作品は多くあらわれる。たとえば1869年頃にエドガー・ドガは《ピアノを弾くディオ嬢》(オルセー美術館)、エドワール・マネは1868年に《ピアノを弾くマネ夫人》(オルセー美術館)などが代表的な例と言えよう。さらには《ピアノを弾く若い男》と同じ、第2回印象派展に、ルノワールは《ピアノを弾く女》(fig.9、1875-76年、アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ)を出品しており、「ピアノを弾く女」はルノワールを代表するイメージとしてその後もこの主題は描き続けられる。これらは、何れの場合も、西洋美術史における室内画の伝統を踏まえながらも、パリの近代化に伴う新しい時代の要素を付加している¹¹⁾。

この時代にピアノという楽器が描かれる意味は、それまでの図像と異なる質も包含している。現在で最もポピュラーな鍵盤楽器であるピアノは、19世紀のフランスにおいては、エラール社によるピアノがそれを代表していた。同社の創立者は、セバスティアン・エラール(1752-1831)。彼は1821年にダブル・エスケープメン・アクション、すなわちピアノの高速連打を可能にし、音楽表現の可能性を大きく広げる画期的な技術を生み出した人物として知られる。19世紀後半にエラール社のピアノの製造は興隆を極め、フランスでは「エラール」という言葉自体がピアノを指し示すことさえあったという。たとえば、ルイ・エノートルは印象派展を見て、『コンスティテューション』

紙(1876年4月10日付)の「芸術的運動、デュラン=リュエル画廊の非妥協派の展覧会」と題した評論の中で《ピアノを弾く若い男》に描かれたピアノについて触れているが、マルシャルが「大きく堂々たるエラールの前に座っている」と記している¹²⁾。

ピアノという楽器が社会生活の中で文字通り市民権を獲得したのは、当時のフランスの経済状況を背景としている。それは、社会の経済力が次第に高まり、経済力を持った市民が都市文化を形成し、そしてその上に強い国家意識が生み出された時代であった。産業革命により勤労者の生活が、労働時間と非労働時間に区分されるようになった。この非労働時間の中で「余暇」、「自由時間」という概念が生まれた。職業を離れた教養や趣味の領域があらたに形成されたのである。ピアノの発展は、音楽を愛好する人々の増大だけではなく、富裕な市民階層において、ピアノが身分を象徴する機能を持ったことにも関連しており、《ピアノを弾く若い男》も明らかに近代化を進める首都パリの新しい時代をささやかに表象している、と見なすことができる¹³⁾。

4. 《ピアノを弾く若い男》の様式

《ピアノを弾く若い男》はオルセーの《床削り》とともに、第2回印象派展の展評において比較的好意的に受け取られた。論評の多くは、何よりも新人画家の絵画が湛える瑞々しさを讃えている。たとえばフィリップ・ビュルティはロンドンで発行された『アカデミー』誌(4月15日付)に掲載した「〈非妥協派〉の展覧会」と題した評論の中で、カイユボットが「情景を偽ることなく真摯に鑑者に伝える見事な肖像画を出品している」と述べ¹⁴⁾、エミール・ブレモンは、『ラペル』誌(4月9日付)



fig.7
ヨハネス・フェルメール《音楽のレッスン》
1662-65年、ウインザー城王室コレクション

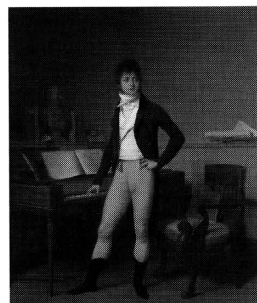


fig.8
ルイ・レオポルド・ボワイエ《作曲家フランソワ・アドリアン・ボワルデュエの肖像》
19世紀初頭、ルーアン美術館



fig.9
ピエール=オーギュスト・ルノワール《ピアノを弾く女》
1875-76年、アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ

に掲載した「印象主義者たち」と題した評論の中で、カイユボットの『《窓辺に立つ男》《ピアノを弾く若い男》《床削り》は、驚くほどの近代性を示している。そして堅固にかたち作られた空間を内包している。それは、気取らず実直に真実、生活、親密さを見事に表現している」と記している¹⁵⁾。

エミール・ゾラは『メッソジェ・ドーロップ』誌に掲載した「パリ便り—5月のふたつの展覧会」(6月6日付)の中で、同年のサロンについて概観した後、第2回印象派展について触れて、モリゾ、ピサロ、ルノワール、シスレー、そしてモネを賞賛している。ドガについては、明るく軽やかな筆致で描かれた洗濯女やバレエの絵を賞賛する一方で、丁寧な筆致で室内の情景を克明に描き出した『《事務所の人々、ニューオリンズ》(fig.10、1873年、ポー市立美術館)について「創造的ではないのかもしれない」と苦言を呈している。そして同様な質を示す新人カイユボットについては『《床削り》と『《窓辺に立つ男》』について「驚くべき立体感をもつ作品だ。ただし、まったく芸術的でない絵画である。あまりに正確すぎるが故に、鏡のように明晰で通俗的な絵画となってしまっている。現実を撮影した写真は、独創的な芸術的才能の刻印によって引き立てられない限り嘆かわしいものとなる」とドガと同様に厳しい評価を示している¹⁶⁾。

『《ピアノを弾く若い男》』《窓辺に立つ男》《床削り》の3点の絵画を特徴付けるのは、比較的暗い色調、入念な仕上げ、堅固な線描といった点である。印象派の大胆な賦彩、明るい色彩や屋外の情景の描写といった特徴よりはむしろ伝統的な手法に近いということだ。カイユボットの初期の絵画様式は、明らかにエコール・デ・ボザールの師レオン・ボナの、アカデミストにしては「態とらしさ」のない比較的穏やかな描法に拠っている。カイユボッ

トの絵画は一方で、印象派のスナップショット的な構図の取り方に対し、遠近法を駆使した計算された構図を特徴とする。それはドガの絵画、たとえば『《事務所の人々、ニューオリンズ》』やバレエを主題とした一連の作品の、画面の一方の上方に消失点を設定した遠近法を使う手法と類似している。さらにはドガ同様に、カイユボット兄弟が関心を持った写真による構図の研究が関係しているのかもしれない。幾人かの批評家たち、たとえばルイ・エノートルやエミール・ポルシュロンは『《ピアノを弾く若い男》』の、俯瞰して見たピアノがすこし歪な形であることを難じているもの¹⁷⁾、その準備素描を見れば (figs.11-13)¹⁸⁾、画面構成においてカイユボットが遠近法を如何に気遣っているかがわかる。カイユボットの絵画が構図への配慮と、綿密な筆致による仕上げのみを特徴とするならば、確かにゾラが危惧するように、絵画としての革新性はモネやルノワールのそれよりも穏やかかもしれない。

『《ピアノを弾く若い男》』に明らかな、カイユボットの初期作品に共通する伝統的な描法は、印象派の初期の活動にあつては、モネやピサロらの手法が突出して革新的であつたが故に違和感があつたかもしれない。それは、印象派がアカデミズム、つまりはサロン画家たちと真つ向から対立する立場にあつた、と当時のマスコミが煽り立てた構図においてもっともな見方であろう。しかし、伝統を遵守するアカデミズムを、前衛の画家が敵視してばかりいたわけではない。ルノワールは、第1回印象派展以前に、すでに何度かサロンに出品・入選していたし、その後自らの印象派的手法に伝

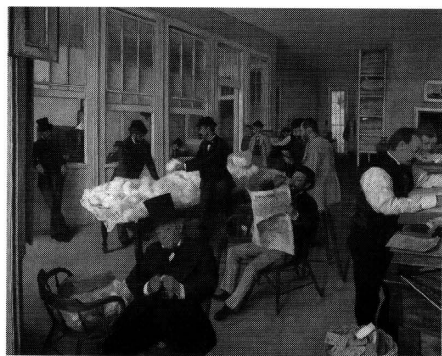


fig.10
エドガー・ドガ『《事務所の人々、ニューオリンズ》
1873年、ポー美術館

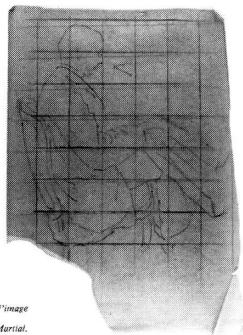


fig.11

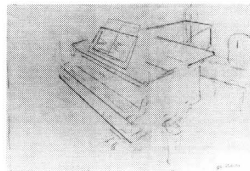


fig.12



fig.11-13
ギュスターヴ・カイユボット
『《ピアノを弾く若い男》
(準備素描)』、個人蔵

fig.13

統的な手法を見直すことにより修正を加え、1879年のサロンには《シャルパンティエ夫人とその子供たち》を出品して、成功を取めている¹⁹⁾。セザンヌもまた、初回に印象派展に参加するも、早々とグループと距離を置いたことが知られる。セザンヌは、印象派の芳醇で破綻のない見たままの自然の色調を伝えるがために純色のみで描く方法は、しばしば遠近感と現実感を失うことに気付き、17世紀の画家ニコラ・プッサンを手本に、過去の偉大な芸術の堅固な量感、永劫に耐えられる強靱さをとどめた印象派の創造に人生を懸けた。一方で、印象派の衝撃とその動向は、伝統を遵守してきたサロンの画家たちにも多分に影響を与え、1880年代後半には印象派の手法は彼らの作品にも認められはじめる。伝統と前衛は、対立しつつも互いに関係を持ち、影響も与え合っていた。印象派とアカデミズムは互いに実は浸透しあい、19世紀という芳醇な世界を織り上げていったのだ²⁰⁾。

このように見るならば、印象派展の初期も実は多様な様式を各々の画家は示していたことがあらためて認識される。モネの《印象、日の出》のように決定的に伝統との乖離を示す傾向があった一方で、ドガの《事務所の人々、ニューオリンズ》やカイユボットの《ピアノを弾く若い男》を含む一連の作品のように、描法としてはモネのそれにくらべて「穏やかな」手法をとった作品も、印象派の初期活動を定義づける上で重要な要素と考えられはじめる。《ピアノを弾く若い男》の様式は、今一度ここで新古典主義の画家ボワイエの《フランソワ・アドリアン・ボワルデューの肖像》(fig.8)と、印象派様式の典型であるルノワールの《ピアノを弾く女》(fig.9)と並べてみるならば、その差異が見えてこよう。《ピアノを弾く若い男》は、確かに賦彩は伝統に拠るが、主題は古めかしい物語の再現に拘泥しないスタイリッシュな近代都市パリを象徴する情景を選択し、逆光の中で映える主題のイメージ、モチーフの表面に描かれた繊細な反射の効果の表現を研究しており、それはモネたちが真摯に取り組もうとした「光」の表現と同列に置かれるべき試みであろう。そして画面全体が醸し出す雰囲気は、アカデミズム絵画にしばしば見られる画面作りの「態とらしさ」が微塵も見られない。この傾向は実はその後の印象派が徐々に認められていく過程にあって、サロン絵画の中で後に徐々に顕著となる傾向であり、カイユボットは彼ら折衷派の先鞭を付けた、とも言えるかも知れない。

革新的なグループにあって、ギュスターヴ・カイユボットという画家が、自ら何をすべきと考え、

それをどうやって果たし得たのかについては、より詳細に議論されなければならない。しかし1874年に革新的グループに出会って後、1876年の第2回印象派展に出品された、短い期間に集中して描かれた作品群は、より詳細に検討すべき要素を多分に残している。たとえば、その影響関係を考察するならば、師ボナのみならず、同時代を意識したスタイリッシュな表現については《赤いソファに腰掛ける女》(fig.14、1876年、個人蔵)に見られるような、近代都市を洗練されたセンスと描法で描き出したジュセッペ・デ・ニティスのなどは手本とし得た画家として注目される²¹⁾。

エミール・ゾラは、先に引用した1876年の展覧会の批評の1年後、『セマフォール・ド・マルセイユ』誌(4月19日付)に寄稿した「パリ・ノート、印象派の展覧会」において、あらためてカイユボットについて触れている。ここでゾラが対象とするのは、同年の印象派展にカイユボットが出品した《パリの街路、雨》(fig.15、1877年、アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ)。場所は屋外へと変更されているものの画家が目指す絵画の方向性は前年と何ら変わるところがない。ゾラはここでカイユボットは「最も勇気ある若き画家であり、真正正銘の現代的主題にも尻込みしない。……カイユボット氏はその才能がもう少しだけ柔軟になれば、必ずやこの集団における最も大胆な画家の一人となるだろう」と記している²²⁾。これはすなわち革新的画家たちを擁護する作家の評価の転換にはかならない。カイユボットの絵画はそれから間もなく印象派的な明るい戸外風景を描いた作品へとシフトしていくが、印象派の画家としての独自性は、初期の作品においてむしろ顕著にあらわれていると言えよう。《ピアノを弾く若い男》は、その意味において、カイユボットの画家としての特質を十分に内包しているのだ。

《ピアノを弾く若い男》は、画家の手を離れた後、一度はギュスターヴ・カイユボットの母親の従兄弟ウジェーヌ・ドフレーヌの手にわたった (fig.16、1878年、個人蔵)。ドフレーヌはカイユボットの10点の作品、すなわち《床削り》、《ピアノを弾く若い男》そして《読書するウジェーヌ・ドフレーヌの肖像》などを所蔵していた。彼が1896年に没した後、それら絵画は《ピアノを弾く若い男》とともに弟マルシャル・カイユボットの手に戻され、その遺族により保存されてきたという。このたび、縁あって石橋財団ブリヂストン美術館の所蔵となり、印象派コレクションの中に加えられることとなった。

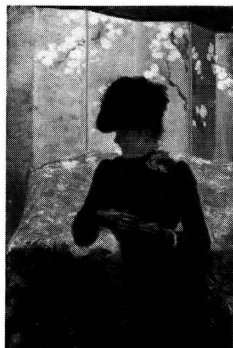


fig.14
ジョゼッペ・デ・ニティス
《赤いソファに腰掛ける女》
1876年、個人蔵

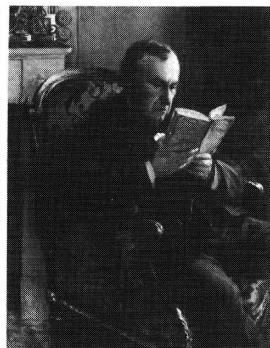


fig.16
ギュスターヴ・カイユボット
《ウジェーヌ・ドフレヌの肖像》
1878年、個人蔵



fig.15
ギュスターヴ・カイユボット《パリの街路、雨》1877年、
アート・インスティテュート・オヴ・シカゴ

註

- 1) Kirk Vanedoe, *Gustave Caillebotte*, New Haven and London, 1987, pp.1-12; 島田紀夫「印象派の風景画家」『世界美術大全集 第22巻印象派時代』小学館、p.277.
- 2) Exh.cat., *Gustave Caillebotte 1848-1894* (eng. vers., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*), Galeries Nationales du Grand Palais, Paris, 12 September, 1994-9 January 1995; The Art Institute of Chicago, 15 February-28 May, 1995; *Dans l'intimité des frères Caillebotte: Peintre et Photographe*, Musée Jacquemart-André, Institut de France, Paris, 25 March-11 September 2011; Musée National des Beaux-Arts du Québec, 6 October 2011 – 8 January 2012.
- 3) Anne Distel, "Chronology", exh.cat., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*, 1995, p.312.
- 4) Ruth Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume II: Exhibited Works*, San Francisco, 1996, pp.33-34; Marie Berhault, *Caillebotte: Sa vie et son œuvre, catalogue raisonné des peintures et*

pastels, Paris, 1878.

- 5) Albert Wolff, "Le Calendeire parisien", *Le Figaro*, 3 April 1876, p.1. in Ruth Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, San Francisco, 1996, pp.53-113.
- 6) Emile Zola, "Deux Expositions d'art au mois de mai", *Le Messager de l'Europe*, June 6, 1876; in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.111-113. エミール・ゾラ、三浦篤・藤原貞朗訳『美術論集』藤原書店、2010年、p.323.
- 7) Anne Distel, "Appendix III: Gustave Caillebotte Collection", exh.cat., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*, 1995, p.322-340.
- 8) Jean Laurent, Pierre Vaisse & Jacques Chardearu, "The New Caillebotte Affair", *October*, volume 31, Winter 1984, pp.69-90. 高階秀爾「ルーヴルが選んだ印象派—カイユボット・コレクション遺贈の真相」(ルーヴル収集秘話・最終回)『芸術新潮』第37巻第6号(通巻438号)、1986(昭和61)年6月、pp.110-114
- 9) Grorial Groom, "71 Yourng Man Playing the Piano", exh.cat., *Gustave Caillebotte: Urban Impressionist*, 1995, p.193.
- 10) Vanedoe, *Gustave Caillebotte*, 1987, p.64. マルシャルの音楽については、以下の音楽CDがリリースされている。*Musique de Martial Caillebotte par Mario Hacquard, baryton, Claude Collet et Pascal Dessein, piano*, 2011.
- 11) James Parakilas & Charlotte N. Eyerman, "Five 1820s to 1870s: The Piano Calls the Tune", in James Parakilas, et al., *Piano Roles: A New History of the Piano*, New Haven and London, 2001, pp.150-183.
- 12) Louis Enault, "Mouvement artistique: L'Exposition des intransigeants dans la galerie de Durand-Ruelle", *Le Constitutionnel*, 10 April 1876, p.2. in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.81-83.
- 13) 大宮真琴『新版ピアノの歴史—楽器の変遷と音楽家のはなし』(オルフェ・ライブラリー)、音楽之友社、2009年、pp.150-162; 西原稔『ピアノ大陸ヨーロッパ—19世紀・市民音楽とクラシックの誕生』アルテスパブリッシング、2010年、pp.102-110.
- 14) Ph. Burty, "Fine Art: The Exhibition of the 'Intransigeants'", *The Academy* (London), 15 April 1876, pp.363-364, see Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.64-65.
- 15) Emile Blémont, "Les Impressionnistes", *Le Rappel*,

- 9 April 1876, pp.2-3. see Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, p.63.
- 16) Emile Zola, "Deux Expositions d'art au mois de mai", *Le Messager de l'Europe*, June 6, 1876; see Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.111-113. ゾラ『美術論集』、2010年、pp.326-327.
- 17) Enault, 1876, p.2; Emile Porcheron, "Promenades d'un flâneur: les impressionnistes", *Le Soleil*, 4 April, 1876, pp.2-3. in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.103.
- 18) Jean Chardeau, *Les dessins de Caillebotte*, 1989, p.28.
- 19) 千足伸行「時代の中のルノアール」『ルノアール展』図録、名古屋市美術館、1988年、pp.20-31.
- 20) ブリュエノ・フカール「IV. アカデミズム第三世代と印象派以後の展開」『フランス絵画の19世紀』展図録、鳥根県立美術館、横浜美術館、2009年、pp.38-139.
- 21) ニティスもまた、近年再評価が進む画家の一人である。2010年から11年にかけてパリのプティ・パレ美術館で大規模な展覧会が開かれている。Exh. cat., *Giuseppe De Nittis: La modernité élégante*, Petit Palais, Musée des Beaux-Arts de la Ville de Paris, 2010-2011, cat.no.95, pp.248-249.
- 22) Emile Zola, "Notes parisiennes: Une Exposition: Les Peintres impressionnistes", *Le Sémaphore de Marseille*, 19 April 1877, p.1; in Berson, *The New Painting: Impressionism 1874-1886, Documentation, Volume I: Reviews*, 1996, pp.190-191. ゾラ『美術論集』、2010年、pp.334-335.

作品基本情報

ギュスターヴ・カイユボット (1848-1894)

ピアノを弾く若い男

1876年

油彩・カンヴァス

81.0×116.0cm

署名、年記(右下に): G.Caillebotte 1876

Gustave Caillebotte (1848-1894)

Young Man Playing the Piano (Jeune homme au piano)

1876

Oil on canvas

81.0×116.0cm

Signed and dated lower right: G. Caillebotte 1876



展覧会歴 Exhibition

2e Exposition impressioniste, April 1876, 11, rue Le Peletier, Paris, No.19. *Works in Oil and Pastels by the Impressionists of Paris*, American Art Galleries & National Academy of Design, New York, 1886, No.28. *Rétrospective d'œuvres de Gustave Caillebotte*, Galerie Durand-Ruel, Paris, June 1894, No.43. *Rétrospective Gustave Caillebotte*, Salon d'Automne, Paris, 1921, No.2704. *Rétrospective Gustave Caillebotte*, Galerie Beaux-Arts, Paris, 25 May-24 July 1951, No.6. *Gustave Caillebotte: A Retrospective Exhibition*, Museum of Fine Arts, Houston, 22 October 1976-2 January 1977; Brooklyn Museum of Art, 12 February-24 April 1977, p.92, No.13, reproduced. Gustave Caillebotte, Musée Pissarro, Pontoise, 22 May-21 October 1984, No.4. *Gustave Caillebotte 1848-1894*, Galeries Nationales du Grand Palais, Paris, 12 September 1994-9 January 1995; The Art Institute of Chicago, 15 February-28 May 1995, No.71, reproduced in color. *Gustave Caillebotte: the Unknown Impressionist*, Royal Academy of Arts, London, No.19, pp.114-115, 115 reproduced in color.

文献 Bibliography

A. de L. (Alfred de Lostalot), "L'exposition de la rue de Le Peletier", *La Chronique des arts et de la curiosité*, 1 April 1876, p.119. (see Ruth Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.86). Emile Porcheron, "Promenades d'un flâneur: les impressionnistes", *Le Soleil*, 4 April 1876, pp.2-3. (see J. Kirk T. Vanedoe, Translated by J. Kirk T. Vanedoe and Suzanne Boorsch, "Appendix A-Criticism" by in Exh. Cat., *Gustave Caillebotte: A Retrospective Exhibition*, The Museum of Fine Arts, Houston and The Brooklyn Museum, 1976-77, p.207; Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.103). Simon Boubée, "Beaux-Arts: exposition des impressionnistes chez Durand-Ruel", *Gazette des France*,

5 April 1876, p.2. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.64).

Marius Chaumelin, "Actualités: l'exposition des intransigeants", *Gazette des étrangers*, 8 April 1876, pp.1-2. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.68).

Emile Blémont, "Les Impressionnistes", *Le Rappel*, 9 April 1876, pp.2-3. (see J. Kirk T. Vanedoe, 1976-77, p.20; Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.63).

Louis Enault, "Mouvement artistique: l'exposition des intransigeants dans la galerie Durand-Ruel, rue Le Peletier", *Le Constitutionnel*, 10 April 1876, p.2. (see J. Kirk T. Vanedoe, 1976-77, pp.207-208; Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, pp.82-83).

G. d'Olby, "Salon de 1876: avant l'ouverture. Exposition des intransigeants chez M. Durand Ruel, rue Le Peletier", *Le Pays*, 10 April 1876, p.3. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.100).

Georges Rivière, "Les Intransigeants de la peinture", *L'Esprit moderne*, 13 April 1876 (reprint: Pierre Dax, "Chronique", *L'Artiste*, 1 May 1876, pp.347-439, see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.70).

Philippe Burty, "Fine Art: the Exhibition of the 'Intransigeants'", *The Academy*, 15 April 1876, pp.363-364. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.65).

Edmond Duranty, *La Nouvelle Peinture: A propos du groupe d'artistes qui expose dans les galeries Durand-Ruel*, Paris, 1876. (see Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, p.72-81).

François Thiébaud-Sisson, "l'Exposition Caillebotte", *Le Temps*, 7 June 1894.

Marie Berhault, *La vie et l'œuvre de Gustave Caillebotte*, Paris, 1951.

Marie Berhault, *Caillebotte l'impressionniste*, Lausanne & Paris, 1968, p.22.

Marie Berhault, *Caillebotte: sa vie et son œuvre: Catalogue raisonné des peintures et pastels*, Paris, 1978, No.30, reproduced.

Kirk Vanedoe, *Gustave Caillebotte*, New Haven & London, 1987, pp.64-65, No.12, reproduced in color.

Marie-Joséphine de Balanda, *Gustave Caillebotte*, Lausanne, 1988, pp.68-69, reproduced in color.

Jean Chardeau, *Les Dessins de Caillebotte*, Paris, 1989, pp.26-29.

Jean-Jacques Lévêque, *Les Années Impressionnistes*, 1870-1889, Paris, 1990, p.297, reproduced in color.

Jean-Jacques Lévêque, *Gustave Caillebotte, L'Oublié de l'Impressionisme 1848-1894*, (Collection: ACR Edition, Poche Couleur), Paris, 1994, pp.33-39, pp.38-39 reproduced in color.

Eric Darragon, *Caillebotte* (Collection: Tout L' Art Monographie), Paris 1994, pp.32-33, p.34 reproduced in color.

Marie Berhault, *Caillebotte: Catalogue Raisonné des Peintures et Pastels*, Paris, 1994, p.78, No.36, reproduced.

Ruth Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume I. Reviews*, San Francisco, 1996, pp.53-113

Ruth Berson, *The New Painting Impressionism 1874-1886: Documentation, Volume II. Exhibited Works*, San Francisco, 1996, p.33, p.47, reproduced.

Pamela Todd, *The Impressionists at Home*, London, 2005, p.31, reproduced in color.

Daniel Chaperon, "Caillebotte, peintre du plain-pied. Points de vue naturalists", in Exh. cat. *Caillebotte: Au Coeur de l'impressionnisme*, Fondation de l'Hermitage, Lausanne, 2005, p.66, reproduced.

Éric Darragon, "Gustave Caillebotte, une nouvelle peinture", in Exh.cat. *Dans l'intimité des frères Caillebotte: Peintre et Photographe*, Musée National des Beaux-Arts du Québec & Musée Jacquemart-André, Institut de France, 2011, p.37, reproduced in color.

Gustave Caillebotte ou les aventures du regard (DVD), un film d'Alain Jaubert, Coproduction RMN, Musée d'Orsay, Paris, 1994.

来歴 Provenance

Eugène Daufresne, Paris; acquired from the artist.

Martial Caillebotte; acquired from the above circa 1896.

Caillebotte's heirs, Paris; by descent from the above.

Private Collection, Switzerland; acquired in 2005.

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundation; from 2011.

※引用図版の典拠は、注で引用の図版か、所蔵館による資料に拠る。